

# 今日世尊の法

## 不思議の巻

- 一 彌陀の光明に満されたる釋尊の五徳……………
- 二 世尊と奇特の三位……………
- 三 慈悲の如來に便りなされ……………
- 四 法身の不思議……………
- 五 衆生法の不思議……………
- 六 佛法不思議……………
- 七 報身の世尊……………
- 八 報身の不思議……………
- 九 大乘教の人生の歸趣……………
- 一〇 念佛とは佛に離れぬこと……………
- 一一 火と炭との喩……………
- 一二 如何にせば慈悲の火が燃つくぞ……………

### 彌陀の光明に満されたる釋尊の五徳

先の諸根悦豫等の三相は彌陀の靈徳に充されたる釋尊の身體形色の上に見れたるを之を模範にして何人も彌陀の信仰に入る時は、凭やうに悦びと清きとが形體の上に現るゝやうに成り得ることを御示しなされたので、是より下の五徳は釋尊が彌陀の心光に融合し靈化したる人格の内容實質に於て、最も美に靈光に充滿たる狀を示しなされた。即ち彌陀の靈力に充されたる釋尊の生活々動の徳を明し給へるのである。斯の五徳は靈的人格を具備する要素として一も缺てはならぬのである。されば吾等も釋尊の模範に倣ひて精神の感情も智力も意志も俱に彌陀に靈化せられて出來得る限り圓滿な人格を形成するやうに期すべきである。

#### 五徳とは

今日世尊奇特の法に住し

一

今日世尊諸佛の所住に住し

今日世眼導師の行に住し

今日世英最勝道に住し

今日天尊如來の徳を行じ給ふ

初めに今日世尊奇特の法に住し。

實に地上唯一の靈たる釋尊の聖徳の赫々として大千を照し給ふ人格は宇宙の中心本尊たる最尊最靈の彌陀の徳光が顯現せしことは、喩へば太陽の光が金剛石に反映する如く靈的感應の狀態である。

世尊——初めに世尊と稱したることは、宗教は先づ第一に信仰の門に入らんには無上の尊敬を以て絶對的に歸命頂禮すべき本尊の實在を信じて己が全身全幅を献げて仕へ奉るべきものである。如來は實に絶對的に尊い靈體に在ます無上の威神力無上の權威者である。如何なる人も斯の最尊者に對しては絶對的に服従すべきものである。世尊は絶對的の權威者として一切衆生に儼臨して一切を命令し降化する權理を有し給ふ。

宇宙中心本尊たる最尊の威權者たる釋尊なれば現地上に於て衆聖中の第一である。全體宗教は信仰の對象たる本尊に對しては無上の尊敬を以て絶對的に信服して自己の全生命を献げて事へ奉る所に於て成り立つものである。故に最も至誠心即ち眞面目でなくてはならぬ。又釋尊は一切天人の崇敬する所、彌陀の靈徳の充たされたる人格なれば、身は人類と同じきも、其の御精神は彌陀の分身に在ます。威神力と自在力と備はりて一切の天龍八部等の爲に尊崇せらる故に亦世尊と云ふ。

奇特の法——奇特の法に住すと釋尊は法に自在を得給へば神變不思議神通自在、聖意の如くに天地自然を自由に給ふ權威者なす。而して一切の凡夫惡魔外道も悉く一度瞻仰すれば其威力に服し邪見橋慢の心も摧伏し降化し給はざるはなし。其の威神力を以て又神變不思議の力を以て奇特を現じ給ふ目的は何故となれば、すべて

三

の人々の罪惡我慢等の皮殻を打破りて人生の最大目的なるミオヤの光を被り聖意に稱ふ人に改造して新らしく生れさせる爲である。

奇特即ち不思議の中に佛法ほど不思議なるものはない。世の最尊靈神なる佛の爲作し給ふ所不思議ならざるはなし。無明罪惡の衆生を改造して聖者の伴侶となし、常没生死の人をして永遠の生命となし、靈的人格に革新せしむる威力のまします。是れ實に不思議である。

### 世尊と奇特の三位

世尊は奇特の法に住し給ふを詳かに明さば法報應の三身共に各々世尊なると共に奇特の法に住し給ふことなり。法身としては宇宙の一切萬法の大原則としてすべてを統攝し給ふ大權威者の故に、宇宙全體の天地的立権者として最尊者である。報身としては淨光明界に在まして一切衆生の心靈を開發し靈化し人々を光明生活に入らしむる大權威者である故に心靈界の一切諸佛天神中の最尊位に在ます故に世尊である。

法身の領分と報身の領分とを區別せば、宇宙は本一體なれども肉眼に賭ゆる自然界の方面と、又心眼開きて觀るべき心靈界の方との二面あり。前者は法身の領する所、後者は報身の領する方面である。法身は天地的に天地萬法の原則として萬物を産出し養成し保存し生滅變化の本源にして即ち天則の大ミオヤにして、現に吾人の地上に人間として活かさるゝは法身の法則と能力とに依るものである。

報身は其の法身より産み出されたる衆生の心靈の卵子を慈悲と智慧との光明を以て攝取して靈的に孵化せしめ給ふ。吾人が光明の生活に入りて現在より永遠の生命として佛化し給ふのが報身の御力である。

應身は現世界に御出ましなされて衆生を教へて報身の光明に歸命信賴すべきやうに導き給ふ釋尊である。釋尊の奇特の法を施し給ふに手段と目的とあり、手段として一切の凡夫外道等を降伏せん爲には種々の神變不思議のことを現じ給ふ。即ち身より

水を出し火を出し空中に於て大身を現じ、又火に入りて焚けず水に入りて溺れざる如きの奇蹟を現したる、其の目的は人の精神を根本的に改造して凡夫の迷を轉じて聖者の悟りとなし、生死の衆生を永恒の生命とし、所謂凡夫を變じて佛とせんが爲めである。人格を根本的に改造する程の不思議は他にあるまい。是れ即ち佛法の不思議である。若し此に大山あり、これを咒力を以て遠きに遷さば何人も其の奇蹟に驚くならん。然し其等は末のことである。惡道に墮つべき惡的人格を佛の教化の下に忽ち淨土に生るべき光明の生活たる人格に生れ更たならば夫こそ眞の奇蹟である。世の人が火に入りて焚けず刀劍の斷々に壞るゝ如きの奇蹟に驚きながら、最も奇蹟中の奇蹟なる人格を靈的に改造するの奇蹟に感ぜざるは實に愚である。見よ釋尊の靈力の不可思議なる鶖屈摩の如き怪力なる凶漢も一言の教化の下に最も聖者とも云ふべき靈的人格に改變せしめ給ひ、又一會の説法に無慮千萬の人の人格を根本的に改造する感神力在ます實に世に尊崇すべき不思議の法に住する聖者たるにあらずや。

### 慈悲の如來に便りなされ

世に獨りの如來の在ますことを識らずして人生を闇の中に過して、又闇に入る人は不幸なものありませぬ。人の子が親を離れて成長することの出來ぬ如く、我等の靈性も如來を離れて育つことは能ませぬ。

愚衲は、わが同胞衆に對して遣る瀧なく迷へる子等を感れみ給ふミオヤの思召を御傳へ申したいのであります。慈悲深き如來が此の可愛き子等に一日も疾く相逢ふて聖意に契ふ様な子に致したく思召給ふことは聖典に示されてあります。同胞衆を慈悲のミオヤに御逢はせ申したいと云ふことに就て、楞嚴經の勢至菩薩の圓通の告白を紹介します。是は勢至菩薩がミオヤの在すことを聞いて深く御慕ひ申されて竟にミオヤに對面なされ、自づと無生忍を悟りなされた御因縁であります。釋尊が一時舍衛國の祇園寺に在して首楞嚴經を御説きなされ、如來甚深の妙理を演べて衆生の心の本源を

明し給ふた。後に世尊は普く會中の諸の菩薩や羅漢たちに向つて斯様に告命られた。今汝等は現に悟りの花開き實を結びてをるが、共に就ては過去何れの處にて何如なる法を聞いて其が聖種となつて今現に斯く證りの身となられしや、入門の因縁を大會に向つて告白せられよ。爾の時は其を聞いて初心の輩の心を啓發する助縁となるからとの如來の命を蒙りて、第一番に最初の弟子なる橋陳如が自分が先に法を聽き入門いたした因縁を告白いたし、第二十五番目に觀音の圓通を得た告白が最後なので今皆さんに紹介します。勢至菩薩は第二十四番目であつた。左なきだに自己の胸中に彌陀の慈悲に充されて燃る如きの信念を世の同胞衆に頒ちたき勢至菩薩が此の好き機會を争でか黙して居らるべき。彌陀の恩寵に動されたる勢至菩薩は、其の從へる所の菩薩等と共に座を起て世尊の御前に進み出でなされた。其装ひは實に嚴めしく紫金の色鮮かに四八の相漬く百福を以て人格を莊嚴し、其麗しさと巍かさは四邊に輝きわたたり。佛の足を頂禮し恭敬合掌して丹果の唇を動かして頻伽の聲を發して佛に白し上げた。佛世尊よ、我過去の恒沙劫の昔を憶ふに、佛世に出給ふて無量光乃至超日月光佛と號け奉る。我れその世尊より念佛三昧の法を授けられました。念佛三昧とは如來は一切衆生の大慈の父に在す。衆生は悉くその子である。さればミオヤは常に愛子を感念し給へども、子の方に於て逃げ隠れて居る時は何とすることも出来ぬ。譬へばこゝに二人の中に於て甲の一人は専ら乙の人を想ひても乙の人が毫も甲の人を憶ふことなく、片念ひにては相逢ふて親しむことは出来ぬ。兩方互に相憶ふてこそ相親しみ得らるゝ如く如來は實に衆生のミオヤに在ます、常に迷子なる衆生を感みて寸時も憶ひ給はざる時なきも子の方に於て逃げ去る時は相逢ふこと能ぬ。如來の衆生を感念することは母の子を憶ふ如くである。いかに慈愛深き母が子を忘るゝ間なく憶ふも若し子の方が母の許を逃げて遠く離るゝ時は如何ともすることができぬ。子が若し母を憶ふこと母の子を憶ふ如くなれば母と子とは生を離るゝとも相違はで相逢ひ相見ることを得る如くに若し衆生の心にミオヤの佛を憶ひ佛を念じて忘れずば、若しは現前

にも當來にも必定して佛を見奉り、佛を去ること遠からず、方便を假らずして自ら心開くことが出来る。譬へば香に染まる人の身に香氣あるが如く、之を則ち名けて香光莊嚴と云ふ。我本因地に念佛の心を以て無生忍に入る。今此の界に於て念佛の人を攝して淨土に歸せしむ。佛圓通を問ひ給ふ。我れ選擇することなく都て六根を攝して淨念相繼て三摩地を得る。斯を第一とす、との勢至菩薩の御詞を布衍して更にお説いたします。焉に家富みて族性の貴き家庭に於て一人の男子あり、常に温かき慈母の抱養の下に掌中の玉と愛ではやされしに、頑是なき孩兒は花に戯る小蝶の跡を追ふて誠に門より出で郊外に歩行く。其ゴム人形の如くに麗はしき兒の狀はそこを通る乞食の眼に映つた。すると乞食は坊ちゃんあなたよ蝶が欲しくば私が捕つて上げます。私が連れて往きませう。と頑是なき稚兒は終に乞食の爲に拐帶されてしまつた。いかに豪性の種でも立派な家に生れた子でも、飢に逼れば乞食の子と異つたことはない。幾年月の久しきに竟に全く乞食と化作してしまつた。全體少年の功名心や虛榮心と云ふものも環境から養はるゝ故に起るものである。然るに乞食兒となつて家庭の薰陶なき兒には其口々の食を求むる外に何の希望も起るものではない。憐れ人非人の兒として路傍に才まなければならぬ身となつた。爾しながらいかに乞食と爲つても心の奥底に潜みたる人間の本性は有てをる。十歳ばかりの折に富貴の家庭に育てられた童兒等の秩序ある遊びを見て初めて内心動き出して思ふた。彼の子さんたちも我も同じ人間である。然るに彼等が暢て立派な人に成らるゝのも子供自分の力ではない立派な親がついて居る故である。我には立派な親が無いから残念ながら非人を以て甘じなければならぬ。佛し自分も人間である、親のない譯はない。願うか親が欲しいと、初めて親を心から尋ぬる心が起つた。今まで久しい間毫しも心に浮ばざりし親を心の底から初めて考へるやうになつた。思ひを潜め心を靜めて能く／＼考へると夢幻の如くに四五歳の時の慈母の懐かしき容が浮び出した。サア夫からと云ふものは何にもして親に逢たくて

もう食ふことさへも忘るゝ程に爲つた。一方に又母の方にても、今頃我子は何處に何うなつて居るやら片時も忘るゝ間はない。縦令何程財寶が山と積でも之を譲るべき子は居らず、いかに學に藝に長じたるも之を傳ふる子なくては、家にも身にも生命の相續なき心地して寂寥に耐られぬ。夫とても元より子のないならば諦らめ易きも子はあゝるのに親の物を子の有とすることが能ぬとは實に歎息の至りであると、久しき間母の方では子を憶はざる隙なきも子供の方よりは母を念ふことななくて過せしが今は初めて子の方からも専心に母を憶へて忘れざるやうになつた。そこで母が子を憶ひ子が母を念ひて兩方の憶念が専らにして餘念なきに至れば、縦令千里の道を隔て、も宛然として感應し相逢ひ相見ることを得らると云ふことであります。此の譬の如くに我等は心靈のミオヤ在すことを識らず、闇より闇に迷ひたる乞食兒の便りなき身となりて六道の衢に彷徨たりしに、念佛三昧と云ふミオヤに相逢ふ法を開て、ミオヤの慈悲を念ひ一心に逢たいと念ひ慕ふて止まざる時は、彷彿として現前にも又當來にも相逢ひ奉ることを得ると。若し大慈の温顔を拜む時は又慈悲の聖意をも窺ひ奉ることを得ると。我等は初めてミオヤの聖名を聞たりと云ふものゝ、實には久遠劫に別れし眞實のミオヤ、縦令ほのかにも逢たてまつることを得れば、我れ本ミオヤの子なれば靈性は本有の自性である。實には此身の生れた時に初めて生れたものでなく、ミオヤと同じく本來無生にして永劫に又滅するものでなき眞理を悟るを即ち無生忍と申します。

勢至菩薩は如來と本來の親子なれば只今親を憶念ひ、親念ひの一心によりて親に逢ひ奉り無生忍を悟りなされた。夫からと云ふものは何れの處にも何れの人の人に向つても唯ミオヤを念せよ、ミオヤを離れては佛になることは出来ぬと云ふ。ミオヤの聖意を都てに傳へてミオヤの御許に歸るべき法を以て勸めなされた。之を念佛三昧と申します。

吾が同胞衆よ、天にも地にも獨り尊るとき又慈悲深きミオヤの在すことを信じられし哉。南無阿彌陀佛とミオヤの聖名を稱へて一心に念じ奉れば、たとへ瞻むことは

できずとも慈悲のミオヤと常に離れぬやうに想はれて、いかに精神的生活を聖く高くし、慰藉となり活動の力と爲るのは實には不思議なものであります。人生是れ程大事なことではありません。眞實にミオヤを便り給へよ。ミオヤを信じてこそ初めて人生の眞理を悟ることを得るのであります。斯やうなことで慈悲のミオヤに便りなされと御勸め申すのであります。

汝が身心は我の慾を貪らんが爲の器にあらず、  
靈我の理想を實現せんが爲に與られたるの具なり

五 戒

- (一) 殺すこと勿れ、汝が靈格を
- (二) 偷むこと勿れ、努力の光陰を
- (三) 姪する勿れ、天魔の使と
- (四) 醉ふこと勿れ、肉と我とに
- (五) 欺く勿れ、己が良心を

## 法身の不思議

一六

宇宙全體が法身なる大ミオヤに在ります。然し佛教は哲學と宗教との両面より宗教的關係を説明してをる。宗教の客體なる法身をも哲學的に觀する時は宇宙の實體即ち理體と觀て眞如と名けてをる。哲學にて眞如と名くるものを宗教にては法身と云ふ。絕對人格のミオヤと信じてをる。哲學は宇宙の實體を知りたいと云ふ知識の要求を満足する爲にて、宗教は我等生命ある人類の根本なると、又救済の主と仰ぐ故に其客體なる本尊は絕對なる人格と信ぜざるを得ぬ。佛教の學者にて哲學的に觀るべきと宗教的に見らるべきとの區別を混じてをる。故に吾人が宗教的に大ミオヤを説くを聞いて基督教に於てをる杯と云てをる輩がある。彼等には逆ても全宇宙に活けるミオヤの恩寵の光明の漲り亘るを感ずる性能がないから彼等には活けるミオヤを信することは出来ぬ。死したる文字のみに佛はあると思ふてをる。吾人がミオヤに活かされつゝある信仰心を以て觀する時は宇宙萬物の中に絕對的に尊とびべき靈に活ける存在を信ぜざるを得ぬ。天地萬物アナタの御恵みに成れる物にてアナタの恩寵は一切の處に充滿するを感ぜざるを得ぬ。我等は大ミオヤの如來藏なる胎内より産出されたる子である。現に吾等は靈に活かされつゝあり、其のミオヤは絕對人格と仰ぎ信じて疑はぬ。

實に不思議——世に不思議と云ふ中に宇宙の秘密藏程不思議なるものはない。實に絕對に奇妙不思議である宇宙の秘密藏は我等が肉眼では其の内面を窺ふことは出来ぬ。宇宙は吾人の肉眼に映する皮相より見ても天に日月星辰の運行あり、地には起伏隱顯生滅變化極まりなき生物あり吾人は内藏より發現せられたる現象界即ち娑婆の舞臺の方だけを觀ても實に奇妙不思議に驚嘆せざるを得ぬ。世に謂ゆる造化の妙用と云ふ、實に妙用である。天地萬物即ち凡ての動物や植物等は何なるもの、手に依て造化せられしや又産出せられしやは、大ミオヤの絕對大なる物に比ぶればミオヤを視ることも

一七

出来ぬ赤兒のやうな吾等には萬物造化の妙用の本源は解らぬ。實に此の絕對の大ミオヤの内面は凡夫の測り知ることは出来ぬ。内面なる樂屋の裡は此の舞臺の表から窺くことは得られぬ。實に大宇宙の不思議なることは、彼の怪力亂神を語らぬてふ孔子さへも天何をか云はん四時行はれ百物生ず。又上天の載は音も無く臭もなし又、君子の道は費にして隱なり等の言は孔子が宇宙の不思議なるを歎きたる語ならん。ペーコンが哲學は少く學ぶ時は無神論に陥るべけれども深く研究する時は實に九若無窮の玄深高遠なるを視れば人智の甚だ微にして數ならぬことを感じて無限者に對しては只畏敬歎服の外なきに至ると。實に宇宙は不可思議である。大ミオヤは赤子の測知すべきでない只畏敬すべき外はない。

一八

宇宙の母胎——宇宙の本體なる大ミオヤは萬法の原則としては法身なる天の父に在ります。ミオヤは唯一なれども内容の秘密藏よりの胎内より一切萬物を産み出す遊より見れば如來藏と云ふ母である。日月星宿及び一切萬物な不思議の如來藏より産み出されたるのである、喩へば數多の子女が一の母胎から産み出されし如く、如來藏の胎内から産出されたる萬物は實に無量無邊である。密教にてビルシヤナ佛を一方よりは金剛界の大目と呼び一面よりは胎藏の大目を名けて居る。大ミオヤの秘密藏の胎内より一切の衆生を産出す。故に母と云ふ意味に見たらば興味がある。

宇宙的大頭腦——或學者が人類の精神は頭腦に在ると曰く、宇宙全體は精神であつて物質である。故に絕對的に大なる頭腦である。故に人の腦髓を組織する石灰質とは全く別の性質ではないと、實に不思議である。吾人の腦は宇宙大頭腦の一分子である。されば吾人の腦はいかに少なるも、本如來藏から産出され而して夫を縮少せし所の分身である、本宇宙の大頭腦より産出されたる一の頭腦である。全宇宙の大頭腦に比して大海の一滴も何とも比較は出来ぬ微少なる頭腦であるけれども此の小なる頭腦の内に無量の事物を印象し貯蓄してをる。世に博聞強記の頭には時間的には長く古今に亘り空間的には廣く世界の事物を見聞して印象し記憶して之を包容する。李博士萬卷の書

一九

を懐にすと、其の頭腦に秘藏してある意味である、又天才の藝術家の頭からは奇々妙々々の文句などを無盡に造り出してをる。人間の小さな頭腦からさへ斯の如し。況や無量無邊の一切衆生の頭腦の一大根源なる宇宙全一の法身の腦に於てをや久遠劫の昔より盡未來際迄の末なき末までの一切の現象、若しくは一切の人類色心依正の萬物を自己の内に容納し存在して常恒不斷に千變萬化の一切の事物を現出して盡ることなき宇宙一大頭腦は不可思議の淵源と云はざるを得ぬ。

### 大造物主と小造物

佛教には萬物生産の起原を造物主とは説かぬけれども、宗教的に一切萬有の大ミオヤなれば若し假に造物主と云はゞ法身の造物主の下に常恒不斷に萬物を建設し造營し變化し破壊し寸時も休息せぬ。何一つとして其の法則と能力との御手にかゝらぬものはない。地上の統ての生物は動物でも植物でも木一大法身たる造物主の分身である。故に小造物である。一切の生物は大なる親の造物に倣ふに各造物の作用を營んでをる。各自の受持に造化の妙用を爲してをる、人は人の子を産み犬は犬の子を産み統ての植物は各其實を結んで種子を造りて幾萬年経ても代々其子孫を遺して種の盡きざるやうになしてをる。實に不思議ではないか殊に能く進化したる人類の如きに至つては最も巧妙に身體の各部も亦精神の働きも爲してをる。眼は視耳は聴鼻は嗅舌は味は各不思議な作用を爲してをる。是れ奇特の法と云はざるを得ぬ。

### 造物主と心

異教徒は造物主と稱してをる。哲學では眞如と云ふを宗教的に云はゞ絶対人格の法身ビルシヤナ佛と名く宇宙全體が即ち唯一の大人格である其の一人格より産出され一切個々悉く衆生である。若し假に造物主と云はゞ法身は大造物主にて一切衆生は小造化である。大造物主が宇宙全體を作り爲して居る故に小造化の一切の生物も皆生

殖的造化を爲してをる。其の造物主の主體は何であるかと云はゞ心である。大造化は宇宙全一の心靈にて一切の個々は其の内の生活の主體が即ち心である。一切衆生の内の生活即ち心が一切生物の本源である。然れば造物主とは心である。生宙全體が唯一の心であつて其の心から發展せられたる宇宙間には實に無量無邊の國土ありて又無量無邊の衆生あり、衆生と國土とは無量なれども其性類を分界すれば、佛教で十法界の中に悉く攝めらる、十法界とは

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛陀を云ふ。前の六界を六道と名けて生死輪廻の凡夫である。後の四法界を四聖と申して生死を離れたる聖人である。六凡四聖を合して十法界と名く。斯く十界の衆生は其の性質と相貌と體格と力量と作用とが各々類を別て地獄の性は邪惡の性にて其相は劇苦間なく、餓鬼畜生乃至天上人間に至るまで其相と性と體とを別々に受けてをる。地獄の極苦天上の妙樂等六道の中の苦樂の相に、又佛菩薩等の大悟の光明の中に位するも其の根本は各自の中心なる心を本とす。其の各自の心には本、十法界の中の何の法界にも成り得らる、性を具有してをる。然らば本が一の心から何故に善惡苦樂の十法界の國土と衆生とに分れ來りしやとなれば之を造り出す本は心なれども之が種々の縁によりて善惡の業を造り六道の苦樂を身に受く、故に六道の苦樂の世界も善惡の衆生も心の作用の云何に依りて造り出す故に心が六道四聖十界を造り出すのである。經に唯是一心と、又、一切唯心造と云ふ是れなり。

若し此れを宗教的に云はゞ大ミオヤより出たる子等が聖意に背きて闇黒の生活をなすのが六道流轉なので聖意に契て光明の中の人となるは四聖法界の聖者である。

若し大ミオヤの光明を蒙りて靈性が開發すれば四聖法界と現はれて大光明中のミオヤと共に永恒の靈福を享受す。未だ光明に接せず靈性開發せざれば靈性有りながら六道生死の中に流轉して善惡の因縁に依りて苦樂の身を受く。

善惡苦樂の六道の衆生も國土も悉く本は一心より變現したるものである故に、心は

不思議である。然れば釋尊が此土に出現して教化を施し給ふ所以は此の不思議なる衆生の心も本、ミオヤの子なればミオヤの光明に攝取せられて永遠の光明に歸入せしめむが爲めに外ならぬ。

### 衆生法の不思議

佛教の唯心哲學では心を萬法の本體としてをる。大にしては宇宙全體、心靈が大造物主にして、一切個々の生物は悉く小造物主である。造物主の本體は即ち心である。心を主體として生けるものを衆生と云ふ。

衆生と云ふことは心を本として斯の世界の上に立つて種々の複雑な因縁相續りて生を受くるものを云ふ。心は不思議である。心の本能に悟りと迷ひと善と惡と正と邪との十界の性能が悉く具有して居る、故に其が種々の因縁の如何に依て穢土と淨土の國土と苦と樂との身を受くる。

宗教的に云はゞミオヤの光明を受けずして無明の六道に流轉するを衆生と云ひ、之を心理的に云はゞ心に迷悟ありて又、眞の自覺の光りを得ずして、生の根本死の終局を覺らずして闇に生れて闇に死し、只善惡の業に隨つて苦樂の身を受け、迷の衆生に六道あり三惡道と三善道となり。三惡道とは惡に三品あり、上品の惡を造りて最も激苦極まりなき極熱の火に燒かれて苦しむを地獄と云ふ。火に燒かるゝ苦あり故に火塗と云ふ。中品の惡を以て常に飢渴の苦しみを受く、刀を以て裁割せらるゝの苦あり故に餓鬼道を刀塗と云く。下品の惡を以て常に弱きものは強きに噉るゝの苦を受く血を流して苦を受くるものゝ畜生道を血塗と云ふ。之を三惡道と云ふ。下品の善を以て憍慢心強く勝他の念厚く名譽の爲めに善を爲し、誇らんが爲に徳を裝ふたるもの修羅道に落ち常に闘争を事とし、只、負けんことを怖れ戰慄して安き時なきは修羅道である。中品の善、常識を備へ人格を全うし人道を履み行ふものは全く人間にして、又更に人間に身を受くべきである。最上品の善を以て公明正大、博愛仁慈なるは天道的に

して天上最勝の果報を受くべし。心一つの善惡邪正の運動の云何に依て獄火の中に激苦を感じ、又は美天國に於て勝妙の樂果を享く。心が六道の元因にして其の心の中に苦樂の花咲き淨穢の果を結ぶ。實に不思議なるにあらずや。若し心なければ善惡を起す主體なし。又心なければいかなる苦樂をも感ずる主なし。心は元、一つなれども善惡苦樂の因果を現じ無量無邊の衆生の身と現はれて世界を充填してをる不可思議ではないか。

一切生物界の本心一から種々無量の分類に發展してをる。不思議である。一の本より生物は無量に分れ、動物も無量と變じ、又植物にも數へ切れぬ種類あり、其の因縁の縁で成る所、奇妙である。又、人間だけにて見るも個々の相貌性質體格力量皆同じくない。世界無量百千の人、其の容貌性格一として特殊の型をなしてをる。人の指紋だけさへも世界中に一人として同一の型はないと云ふ。然らば身體の所有眼や耳の官能胃や腸の機能、何れの處に亘りても決して全分同一型はない。是れまた衆生の不思議ではないか。

又、眼の色を視、耳の能く聲を聴き、鼻能く香をかぐ作用を有て居る。又言語は相互の心意を發表し思想を交換してをる。都て其の作用奇妙ではないか。

又生物進化の理に於ても、原始的のアミンパ底の微粒の生物より無數の階段を経て遂に人類にまで進化せしと云はゞ其の始めの微少の細胞の中に進化すべき伏能を有つて居つたと云はねばならぬ。其の無數階段を僅か胎内十月にて繰かへすと云ふ。人の始めて妊娠したる一微粒の精子が卵子中に一人の身體各部四支五官よりして解剖學や生理學にて説明してをる非常な復雜極めたる一切の全部を伏藏して居つたと見なければならぬ。是又衆生法の奇なる理法にあらずや。

微粒の精子に世界を震動せしむるやうな人傑と成り得べき伏能を有し、又極微少な植物の種子核の細胞に大きなニクルイ樹を發展するが如き實に衆生法の不思議なり。又生物の遺傳性は極微の細胞中に伏藏して其の種族を百千代に傳へてかはらじ。

衆生法が生物の本同一の原始生命より出でて動物と植物との兩界に分れ、動物中にも數多の分類あり階段あり。植物にも幾多の類あり科あり。斯く無量に分れ出づる是生物理法の不思議である。又、衆生の内的生命の心なるものに至つて更にまた不思議である。心を本として善惡の云何より三善道三惡道の苦樂の身を受く。是れ不思議なり。唯涅槃常樂世界のみ妙なるにあらず。心が變じて阿鼻焦熱の炎と現じ、天上勝妙の樂界と感ず。是れ皆心を本としての衆生法不思議ならざるはなし。

衆生は本、ミオヤの絶妙界に入るべき性を有しながら六道生死の不思議の苦を感ず。之を衆生法と爲す。

### 佛法不思議

若し哲理に云はく心を本として迷ふ時は六道生死の苦を受け、悟る時は常住涅槃の妙樂を受くと。

宗教的に云はくミオヤの光明に遇はずして愚蒙の衆生ミオヤに背きて自ら生死に流浪す。ミオヤの光明に遇ふ時は靈は復活し聖意に稱ふ人となりて現在より永恒の靈福を蒙る。

佛の三身の中にもと法身より受けたる衆生なれば靈性を具有すれども、又報身の光明に接觸せざれば靈に活きることほできぬ。故に靈性が伏能として衆生法に規定せられて永く六道苦樂の身を受く、是を衆生法と名づく。

若し報身如來の光明に攝取せらる、時は本具の佛性開發し、煩惱は靈化せられて永恒に光明の中の人となり永遠の光明に向つて無上菩提の大道を進ましむ。宗教的に謂ゆる報身の光明は靈的生活の向上的道程を佛法と云ふ。

人と生れたる上には其の天稟の善良なると弊惡なるとに係らすいかなる人も宗教の必要あり。喩へば寶石に璞垢ある如く何人にも動物的の煩惱性を有てをる。又如何に猛惡たる輩も靈性を具す、故に宗教の要あり。煩惱の塵垢を除淨するにあらざれば靈

性開示せず。又靈性開發するにあらざれば永遠の光明に入ること能はず。煩惱に八萬四千あり、之を照す所の光明八萬四千あり。衆生の靈性を開きて一切種智の光明を顯はす無上正覺の法無量なり。彌陀の十二光に一切の徳を攝して遺すことなし。受け難き人身を受け、幸に佛法に遇へり。然れば殊に宗教的に活ける如來の光明に觸れて靈に活くべきである。活ける佛法に遇ふことを得たるは實に幸である。

彌陀の光明に觸れて佛法不思議を知り給へ。此より説明する所は報身の不思議である。

### 報身の世尊

報身如來は十方無量一切世界の諸佛神明の中心本尊に在ます。人間の肉眼にて見ゆる宇宙は天に日月星辰列なり地には一切の生物が生存在して居る。報身如來は肉眼にては視ること出来ぬ。釋尊が初めて無上正覺を成じ給ひて佛眼を以て視給ひたる最淨最妙の靈界を蓮華藏世界と云ふ。一切の諸佛賢聖の安住し給ふ處。

其中心蓮華臺に舍那圓滿(無量光)如來、最も麗はしき相好、無量の光明を照らして普く十方法界を照し給ふ尊體を報身如來となす、是れ全法界一切世界諸佛を統御し給ふ唯一の尊き靈體である。是れ大乘圓教に於てのみ明し給ふ尊體である、故に釋尊も亦一切の諸佛も斯の淨滿如來の指揮の下に一國の教權を授けられたる教主である。

林網經に我れ今盧舍那方に蓮華臺に坐す、周匝せる千華の上に復千の釋迦を現じ、一華に百億國あり一國に一釋迦在す、一時に佛道を成すと、此意はルシヤナ如來は光明遍照十方世界の念佛衆生を攝化し給ふ靈體にして即ち靈界の太陽に在ます。凡夫

の眼には視えねども釋尊が正覺を成し給ひて佛眼を以て知見し給ふに盡虚空備法界を一とする蓮花藏世界の中心にルシヤナ如來廣大無邊の妙色身を以て一切諸佛の本佛として一切に照臨し給ふ。斯の如來の統御し給ふ千の世界に千の釋迦在まして、又一世界毎に百億の世界ありて一々の世界毎に一釋迦在まして、各其國々の衆生を教化し給



ふ。その中尊の如來を圍繞し其の使命を奉じて、各一世界の一佛となりて其の世界の  
敬權を掌り給ふ。千に各百億なれば即ち十萬億の佛土を統領し給ふ中尊の故に之を報  
身如來を以て盡法界の世尊なり。

### 報身の不思議

其れ奇特の法とは本、法身より生じたる人の靈性を開發し、煩惱の惡質を脱却し靈  
化して衆生の人格を根本的に改善し給ふ靈能に在ります云ふ。云はゞ法身なる右の御  
手より播布せられたる衆生の佛性を報身なる左の御手に依りて慈愛の光明を以て心靈  
を長養し心靈の花を開かせ靈の果を成熟せしめて諸佛と等しき覺位と永劫の生命と圓  
満なる靈格を成さしめ給ふ作用を掌り給ふ靈力である。無明生死の方面にある衆生を  
永遠の光明界に攝取し給ふ如來である。實に報身の奇妙とは此の垢障覆深なる凡夫の  
人格を改革して清き人と爲し給ふこと何なる不思議か之に如ん。法照禪師が謂ゆる瓦  
礫を變じて眞金となすは是れ報身の奇妙である。

(二)

報身の不思議は佛智不思議等の作用にして、例は太陽の光が稻麥の實を成熟させる  
増上縁たる如く如來佛智の光明は實に不思議である。報身佛の無盡の相好莊嚴身も亦  
淨土の無比莊嚴の相も悉く佛智不思議の變現である。今吾人が現在肉眼にて現實世界  
と感じてをる世界の淨穢苦樂の相は衆生が自分の阿賴耶識を以て各自が鏡々に感覺し  
て居る。同じ世界に在りても動物昆蟲の類は人類の見つゝある美觀に對しても何の美  
觀はない。夫は夫の世界を感じ馬は馬丈に感じてをる。人類は人類の阿賴耶識の色眼  
鏡を以て天地萬物を人間式に感じて居る。

全宇宙は絕對無限にして娑婆と淨土との橋壁はない。衆生の阿賴耶識にて見れば全  
宇宙悉く娑婆界にて佛智の光明が開けて見れば全宇宙悉く清淨國土である。同一の  
宇宙を佛智の明けたる人が見れば晝の世界にて、凡夫には夜の世界の方のみを経験し

てをる。

法身より受けたる佛性を具しながら未だ無明の夢睡めず、阿賴耶識を以て我とし、  
善惡の業に依りて苦樂の身を感じ生滅變化極まりなき現世界の一大パノラマの種々の  
變現衆生相互に有爲轉變の悲劇と喜劇と幻化の相を互に視たり視られたり、或は悲泣  
し或は歡笑す、一切の幻相實は如來藏不思議の變現を衆生が阿賴耶識の色眼鏡を以て  
或は悲觀し或は樂觀す。何も人生の目的自覺せざる程は一場の夢に過す。

極樂の淨土と現れたる方は即ち佛智の夜明けたる晝の世界である。故に娑婆と淨土  
とは處を同うして凡夫のアラヤシキにて見れば娑婆にて佛智の光明にて見れば淨土で  
ある。故に經に淨土に生るゝ人に胎生と化生とあり。彼の彌陀の淨土も娑婆と同じく  
人類の善惡の業から感じたる世界と同じ理のものにて淨土の生を願ふものは、淨土は  
佛智の顯現である眞理に於て明かにしないから、五百歳中胎生すと。

若し淨土は全く佛智不思議不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智の光明より顯現し  
たる世界なれば凡夫が自己の妄識を捨て、佛智を信じて光明の中に靈活する時はたと  
へ身は娑婆に在りても神は淨土に逍遙す。故に命終れば即時に蓮華化生して佛の知見  
し給ふ如くに佛土ぞ知見することを得。去れば報佛の不思議を信じて明かに佛智を信  
じて光明の人と爲る時、大利を得ると經に説き給へり。

### 大乘教の人世の歸趣

吾人が此世に生れたる目的は那邊にあらう。大宇宙のミオヤは何の爲に衆生を活し  
なさる聖意であらう。其理の自覺出來ぬのが即ち凡夫である。經に諸の凡夫自ら智  
ありと謂へらく、生の從來する所死の趣向する所を知らず、闇より闇に彷徨てをる。

然れば應化の世尊すら一度人身を受けなされて俗間に在らせられし昔は人生問題の爲  
には痛く煩悶し給ふた。竟に入山學道の結果として生死の究まる處不思議の淵源妙法  
の玄底に悟入して絕對界の内面秘密の寶殿を開きて無量光如來の聖意を體得す。即ち

如來の光明は遍なく十方法界を照し念佛の衆生を攝めて靈化の妙用を施し給ふことを發悟し、茲に於て初めて大宗教育家としての靈格を具備し給へり。

釋尊が宇宙中心本尊たる彌陀の光明に接觸し給へる内容の狀態は甚深にして是れ佛の自境界、凡夫の窺ひ測る所にあらず。然れども吾人をして自ら悟り給へる妙境に誘導し給ふ本意の在まことを信する時は、此の消息を汲むも亦許し給ふ所ならん。

釋尊が絶對大靈其もの、内藏に融合して神秘の奥室を知見し給へる其の靈境は先にアラ、仙等が觀てをる非々想天などの様な皮相なるものでない。全く無我眞如の絶頂に達し生死の源、罪惡の根底を亡ぼし、舍那圓滿の内容、入我々入の神秘の奥に入ればそこに初めて久遠劫來永く別れし本覺の慈父と親炙して自性法界宮に父と共にある身なるを覺り給ふた。之を無上正覺を得たりとす。即ち無量光の顯現したる人格の意である。そこは永劫常樂の都なれば涅槃界と云ふ。即ち無量壽國に永住するの意にてある。

大乘佛教の終局の歸趣する處は無量光に攝化せられて無上正覺を成じ、無量壽國に生れて常樂涅槃を得るにあり。

然してより己來釋尊は一切衆生に大宗教育家としては教ふるに彌陀の光明に攝取せらるべき念佛の法門を以てす。然しながら大宗教育家としての釋尊も宗教的の模範を示し給ふ時には彌陀の光明に攝取せられて靈化し成佛し給ひたる佛身にして、一切衆生をして皆彌陀の光明を蒙りて永遠の光りに歸すべきの眞理なるを教へ給へり。大乘佛教の人生の歸趣の理は茲にあり。

### 念佛とは佛と離れぬこと

念佛は大乗佛教の宗教的意識の最大事である。一切萬行は是より出づ。一切諸佛は此念佛に依て成佛せしと經に示されてある。念佛とは念する人と如來と共にして離れぬ意義である。念と云文字は人と二と心にて即ち二人離れぬ心を云ふ。世に念頭に繋ると云ふは自分の外に他に或物に對して其胸臆に往來して離れぬことである。例へば孝行の子が常に其父母を憶ふて念頭に捨てざる如く、人は本心に愛する人をは忘れんとしても忘れられぬ。詩經に中心之を嘉みせば何の日か之を忘れんと云やうな工合に終始其念頭に在て離れぬを念と云ふ。今念佛とは自己の心裡に今世後世を通じて生命を獻げて信愛する彌陀尊を常に念頭に戴きて、離れぬを念佛と云ふ。即ち佛念心の心である。絶對的に尊きすべてに超て信愛する如來を、常に頭に戴きてをることである。觀世音菩薩が御頭にいつも彌陀尊を戴きて在すのは、其意味を表徴したのである。故に觀世音はすべての念佛者の先達にて念佛する人は誰人もかやうに爲れとの模範を示しなされたのである。觀音菩薩の頭(精神)には彌陀如來が威神光明赫々として照鑑し玉ふことを信じなされてをる。其胸の裡は常に彌陀の慈悲に充たされてをる。何人も彌陀の慈悲に満たさるゝ時は大小はあれ觀音と爲るのである。觀音の念頭には永しへに彌陀如來が離れぬ。彌陀の光明に靈化せられた人格が即ち觀世音である。今の念佛者は生れた許りの觀音である。念佛者の念頭には最も尊とき彌陀尊が常に眞正面に在ますことを念ふ時は、縱令肉眼にて人の面貌を見る如くに視へぬからとて、心眼の前に威神光明の如來が實在するを念する時は、肉の形に見ゆる人よりは優に尊とく有難く思はるゝ。本より眞の如來は肉眼にて瞻めるものでない。觀經に如來は是れ法界身に一切衆生心想の中に入り玉ふと。夫を聖體は法界身とは肉眼にて見べきものでなく意識の對象にて即ち心眼にて觀べき尊體であると釋された。

如來は本來大靈體にして實に一切の處に何れの處にも在まさざる處はない。但し人

の信心の鏡が明かならざる爲に影現せぬ。如來は靈體にて色心不二である。一方より見れば、大智慧の光明として徧なく照り渡れり。また一面よりは何とも云はれぬ麗はしき妙色相好身と現はれたまふ。故に衆生の一心に念佛して信心の鏡だに明かになれば、或は麗はしき相好身と現はれ、或は大慈悲として有がたく感せらる。經に衆生信水澄む時は佛日の影映ると。如來は常に念する人の眞正面に在ます。但自己の心水が濁りてをる故に分明に現はれぬ。信心の水さへ澄淨む時は必ず明に映り來る。然らばいかにせば信心の水が澄むやうに爲ることになる哉との問題が起る。そは他なし、唯一心に念佛して心々相續し、念々に佛を念じて不斷なる時は、必ず信心の水澄みて如來は我心水に宿り給ふに至る。經に如來光明威神功德を開て至心不斷なれば心の所願に隨て光明の中に生ずと云も其意義に於ては同一である。讀者諸君よ諸君の日常の胸臆に多く往來してをる物は何物であらう、どう云ふ事が常に念頭に繫つてをります。あなたの心を誘なうて高く／＼清く／＼仰ぐも畏こき計りに向上させるやうな事は有ますか。若し念頭に彌陀を離れたならば貪瞋五欲の想のみで有りませぬか。經に一人一日の中に八億四千の念ありて、念々の所作皆な是れ三塗の業と説玉うてある。そこで未だ信心の光明を得ぬ間は日々闇の裡に三塗の業を造りつゝあるも夫が分らぬのである。いかゞでせう諸君、元來人間の生れたまふの心は木劣等な本能的な動物性なのである。之に加ふるに五塵六欲の塵埃に惹れた心は實に淨いものでない。毎日胸の中に性來する念は貪慾の餓鬼瞋恚の地獄愚癡の畜生の心を以て塞がれてをるでは有りませぬか。宗教上より云はゞ人間の最も貴重なものは自分の心念の向け方と働き方のいかゞであります。地獄を造るも佛を造るも、日常の心頭の働らきを本と爲るのであります。そこで衆生は本來心の奥底に佛性を具有してをるけれどもそは未だ鶏卵の如き物なのである。爰に於て此佛性の卵をあたまて佛子と爲るのに唯一の法は念佛ばかりである。念佛とは佛を念ふ心なのである。我等が口にナムアマミダブと御名を呼ぶ時に、心の眞正面に最と尊と彌陀尊が威神の光明赫々と照らし慈悲の尊客我

を見そなはし給ふと思ふ時は、いかに我らが淺間敷心も、自づと正しくせざるを得ぬ。實に我らは弱き者、自分の心のみでは闇の中に罪を造る外はなき物である。唯神聖なる如來を念する時にのみ初めて佛心我に來りて我心と爲り給ふ。如來は念佛者に對して増上縁と申して非常な大なる力を以て助け玉ふ。例へば我らは或縁に觸れて勃然として忿を起す時にフツト氣づきて佛を念する時、尊とき如來は大悲の笑顔を以て我面前に在ますと念はるゝ時は、いかに我らが忿怒も自から和らざるを得ぬ。また我等が事に依りて悲しみに耐へぬ變じさにたまらぬ折も口に御名を稱へて大悲のミオヤを想ひ奉つるとき何とも云はれぬ有がたさと歡びとが胸の中より湧出し、無限の慰安を與られる。實に何なる事にも増上縁と云ふ強き力を以て助けて下さる。我らは弱き凡夫である。必ず大悲のミオヤを離れてはならぬ。其大悲のミオヤが我らが念頭に往來して我を助け給ふ其心の表現が即ち稱名の聲である。其稱名の聲を發する心の奥には大悲のミオヤが在ます。是を念佛とは佛と自己と二人にて自己の中にいと尊とき一りのミオヤの在ますことと申すのである。

### 火と炭との喩

時は嚴冬の寒さの極みなる頃に、座敷の隅の火鉢の中に火がカン／＼と燃てをる。而すると誰人も寒さに耐えぬから遠慮なしに兩手を其上にかざしてをると、自づから全身が暖かになる様な氣持がする。あの火鉢の中の眞紅な熱い火がいかゞでせう。未だ火鉢の中に入らぬ前炭箱の中に眞黒な而して冷たい炭で在りし折は、何人も顧みる者もなかつた。若し之に手を觸れば意地悪に手に黒く染つく。されば誰人にも嫌はれる性質を持って居た。然るに其が一旦火鉢の中に入りて火と結婚して相互に抱擁して同體一心とも爲つた後には不思議では有りませぬか。性格が丸で一變して忽ちにアノ眞黒な面は變じて春の彌生の桃の花よりもつと紅の色と爲り、元は愛嬌のない冷たい炭が今度は非常な燃つく様な愛嬌者と爲りて、而していかに高位な方にもまた卑賤な

者にも分け隔てなく同じやうに暖かためてやる。されば何人も其温かなる愛嬌と同情とは引つけられて、手をかざしてをるとさうすると不思議な事には今までは蒼白な顔をして指先のかちぢて居つた人も忽ちに元氣が復活して顔は紅を催し指は自由の働らきを作すやうに爲る。また元は炭には冷水を沸す力は無かつた物が今は冷水をも忽ちに沸湯と化し飯をも有ゆる料理をも勇ましく煮あげる能力を持つやうになる。さればこそすべての人に歓迎せらるゝ物となる。諸君よ私共の胸の全部を占てをる煩惱は炭である。直に腹を立てるネヂクレヒガム取越苦勞をするまた貪はる實に有ゆる弱點を持って居り、而して我れがくゝとガン張りてをる。自分が意地の悪い癖に若しも他人が自分に對して譽もせぬとかまた親切にせぬと直に不足に想ひ、自分は他人に對して毫も親切や同情の暖みのない冷たい私共の心である。若しも手を觸れば直に黒く染つく如くに私共は他人の悪い事を人に聞かせ悪影響を他人に染つけやうと爲る氣分を持ってをる。實は私共の心は煩惱の自分勝手な仕方のない奴で在つた。然るに私共の煩惱の炭に彌陀大悲の火が燃つく時は、忽ちに心が一變して心の色が紅蓮花の如くなる。されば經に念佛する者は人中の妙好人最と美しき蓮華と譽たまふ。念佛して彌陀大悲が我らの胸中に燃つく時は有がたさと歡喜とがカン／＼と燃あがり、實に歡喜踊躍の状態と爲りて燃ゆる心念の能力である。經に斯光に遇ふ者は三垢消滅し歡喜踊躍を得るは是である。また炭の働きに煮焼の働らきを爲す如くに如來の恩寵に充され感謝の念に動かされて日々所作も勇ましく働らけるやうになる。火より蒸氣を發して非常な力を爲す如くに、彌陀の恩寵の火が我らが心に燃つゝある時は人格が一變する。身も心もすべての形氣の惡質が靈化して如來の聖意を自己の意と爲し慈悲に同化し親切な心を以て他人に待し得らるやうに爲る。然して見れば我等が煩惱の炭が有ればこそ如來の御慈悲が燃つきて、如來の恩寵を現はす器械と爲るものとすれば、我等が煩惱とて決して捨てべきものでなく、唯慈悲の光を得て慈光の燃ゆる心念と爲さばよいと信じます。

### 如何にせば慈悲の火が燃つくぞ

我等が煩惱の炭に慈悲の火が燃つきさへすれば、忽ちに心が一變して、昔に換りて悪にも強きは善にも強きとの諺の如くに人格は一變するとのことは今は疑はじ。然らばいかにせば我らが煩惱の心に慈悲の火が燃つくべきぞとの間に對しては、こゝが諸君に御勧め申す肝心な事である。若し火鉢の炭に火を熾んに燃つかせんとする時は、開扇とか火吹筒を以て酸素の風を輸りつける。而すると初めは微少の火が漸々に燃つきて熾かんに爲りゆく如くに、念佛とは如來の慈悲の火が我等煩惱の心に燃つくのである。如來の慈光の燃つくのは我等が心である。夫に口に稱名を唱ふるのは何の爲であるとなれば恰も火吹筒で煽り立て、酸素の風を輸り込むやうなものである。但し煽り立てるのも炭に火の燃つかせる如くに佛念の心を發す爲である。彌陀の慈悲の光が我等の心に燃つく處に念佛の眞意が存す。例へば幼稚な子供が親より命せられて汝此火鉢の炭を火吹筒にて吹くよと云ふので頑是ない子供は火を燃えつかせる爲とはしらぬ。唯吹けばよいと思ふて火の消え失てをる炭を吹立てをる如くに念佛さへ申せばよいと思ふて口に稱名を唱へて居ても、心には彌陀の慈悲を離れて居ては無意味である。念佛は佛念の心に常に念佛を念じて離れぬことである。されば何人も決して救ひを受えられぬ者は無い。世に私共の如き煩惱の強き者は念佛しても駄目である救ひを受得られぬと自暴自棄し玉ふこと勿れ。眞黒な煩惱の炭なればこそ慈悲の火が燃つくのである。灰の如きはいかに白く淨いからとて灰には火が燃つかぬ。私共の煩惱の炭は本より彌陀の慈悲の火を燃やす爲のものと思へば還て頼母賊感せらるゝでありませう。念の字が二人の心とは炭が獨りではなく火と一體と爲りてこそ斯は大きな働きを爲す。我ら心は一人でなく彌陀の慈悲と一つに爲りてこそ非常な力を得而して勇ましく有難さと歡こびとの燃たつやうな信仰心と爲る。日々熾かんに燃やす石炭の火力なる念佛にて日々眞善美の淨土に向て進行する。愆の如きの人生の行路は樂しくして且つ前途の光益明かである。

昭和三年九月廿八日印刷  
三十日發行